

通訳教育のための音声知覚研究

高橋 絹子、大井川 朋彦

上智大学大学院 外国語学研究科 言語学専攻

Abstract

In the present paper, we report the series of our interpretation studies from the viewpoint of phonetics. We conducted two research studies regarding phonetic perception with professional interpreters and student interpreters (Takahashi & Ooigawa, 2009, Takahashi & Ooigawa, 2010). In the results, there was no significant difference between the two groups. On the other hand, it was found that there was a significant difference between a group of returnee interpreters and non-returnee interpreters (Ooigawa & Takahashi, 2010). However, in order to draw conclusions about the possible relationship between interpreting and phonetic perception, further in-depth research is needed.

1. 導入

1.1. 目的

本稿では、私たちが行なってきた日本人の通訳訓練生とプロ通訳者の音声知覚に関する一連の研究を紹介する。一連の研究は通訳訓練を受けている訓練生にはどのような問題があり、それはどのように克服すべきかを音声知覚の面から考察するものである。プロの通訳者のみならず、一般的に通訳ができるようになるためには、さまざまなスキルが求められている。プロには、適性や経験なども重要な要素となるが、通訳ができるようになるためには、さまざまな文献でも述べられているように、対象となる言語の語学力は不可欠である。その中でも、通訳は書いてあるものを訳す翻訳と異なり、「聴き取り」に大きく依存した作業であることから、通訳者の「聴き取り」に焦点を当てて、研究を行ってきた。最終的には、研究の成果を通訳訓練のシラバスやプログラムに反映させ、通訳者になりたい訓練生はもとより、通訳ができるようになりたいと望む学生の一助となることを期待するものである。

1.1. 通訳とは

通訳には大きく分けてふたつの手法がある。話者の発話と同時に通訳が行われる同時通訳と、話者の発話が一旦停止した後に行われる逐次通訳である。同時通訳の場合は、通訳者は常設または仮設の通訳ブースと呼ばれる周囲から仕切られた場所で、ヘッドセットから聞こえてくる音声を聞きながら同時にマイクに向かって訳出を行う。聴衆は、この訳出を同様にヘッドセットを使って聞く。これに対し、逐次通訳の場合は、通常は話者の横の通訳者が、話者の発話を聴衆に向かって訳すが、この場合は話者と通訳者が交互に話すことになる。これは一般的、かつ根本的なふたつの分類の仕方であり、さらにウィスパーリング通訳や放送における通訳などさまざまな分類がある。

対象言語に関しては、日本の通訳者の場合は、日本語から英語へ（L1 から L2 へ）と、英語から日本語へ（L2 から L1 へ）の双方向の通訳が求められる。本研究が対象としているのは、逐次通訳で、言語は英語から日本語への通訳である。

1.2 用語の定義

本研究で扱っている通訳訓練生とは、社会人で通訳の専門学校に通って通訳訓練を受けている通訳訓練生、ならびに大学の授業で通訳訓練を受けている大学生、大学院生である。通訳訓練生には、帰国子女、そうでない者の両方が含まれている。そうでない訓練生は、俗称として帰国子女と区別して「純ジャパ」「国産」と呼ばれることもある。さらに通訳をする人のことは「通訳者」と呼ばれ、行為そのものである「通訳」とは区別される。

2. 動機

本稿の第一著者の修士論文では(Takahashi, 2009)、通訳訓練生に4種類の英語のマテリアルを逐次で日本語に訳してもらい、実験後に英文のトランスクリプションを提示し、通訳した音声を再度聞き、自分の通訳について分析してもらった。訳出の中には、ソーススピーチから内容的に大きく逸脱したものもみられた。インタビューの際、その理由として、「音声の聴き取りができなかった」というコメントが過半数の訓練生から得られた。例えば、‘bleed’

が‘breeze’に聞こえたり、‘attendance’が‘tendence’に聞こえてしまうといったことであった。そのため、聴き取れた単語だけで訳出を考えるため、もとの英語の内容とまったく異なる内容の訳出になるということであった。聴き取れなかったという単語は、未知語というわけではなく、「音声聴き取れないので意味につながらない」というコメントであった。では一体、どれくらい音声の認識に問題があるのか調べてみたいと思ったのが、この一連の研究の発端である。

3. プロ通訳者 vs 訓練生（単語単独の同定）

音声の聴き取りができなかったのが原因で正しく訳せなかったという訓練生のコメントを検証すべく実験を実施した。その際、訓練生の聴き取りと比較するために、実際に活躍しているプロの通訳者に参加を求めた。実験内容は、最小対の単語の一つを聴き取り、それがパソコンの画面上に表示されている最小対のどちらの単語であるかを同定するものであった。その結果、通訳の正確性と同定課題の正解数の間には明確な関係は見られず、音声の聴き取りの困難を強く訴えていた実験参加者の聴き取り実験の正解数は、参加者自身の訴えほど悪いものではなかった。むしろ自らのコメントに反して、結果のすぐれた参加者も存在した。さらにプロと訓練生の正解数の間にも有意差は見られなかった(Takahashi & Ooigawa, 2009)。

4. プロ通訳者 vs 訓練生（文中の単語同定）

Takahashi & Ooigawa (2009) では刺激は単独の一単語で、また刺激の吹き込みを行った英語母語話者のスピーカーも 1 名だったので、一単語に集中し、なおかつ音声にも慣れてくればできるかもしれないとの推測に基づき、更に、より難易度の高い音声知覚実験を行ってみた。今回は、同様に最小対を用いたが、それを文中に埋め込み、最小対のどちらの単語が入っているか意味が通じるような文を考案し、同じように流れてきた文の中に入っていた単語をパソコンの画面上の最小対の単語から同定してもらった。今回は吹き込みを行った英語母語話者も男女合わせて 3 名とした。しかし、再びプロの通訳者と訓練生の正解数の間に有意差は見られなかった(Takahashi & Ooigawa, 2010)。

5. バイリンガル（帰国子女も含め）の通訳

一方で、通訳訓練を受けていない帰国子女に、英日の通訳を行ってもらい、その通訳を分析したところ、細かい部分でソーススピーチとのずれがあったものの、大きく内容を逸脱したものはなく、要旨は取れていた(Takahashi, to be published)。これは Harris & Sherwood(1978)の先行研究の結果を受けて行った実験である。Harris & Sherwood(1978)がバイリンガルの家庭の子どもを調査したところ、バイリンガルの子どもは通訳のやり方を教わらなくても生まれながらにして通訳ができるという結果であった。この研究には日本人の子どもは含まれていないため、日本人の帰国子女を対象に通訳実験を行い、その結果の比較を行った。実験参加者の通訳はバイリンガルの子どもほど正確にはできていなかったが、ソーステキストから内容が逸脱せず、しかも要旨が取れていたということは、やはり音声認識に違いがあることも関係しているのではないかと推測できないこともない。しかし、この実験からは、この点は明確にはできなかった。

6. 帰国プロ通訳者 vs 国産プロ通訳者（文中の単語同定）

そのため今度は、第一段階として、帰国子女のプロの通訳者とそうでないプロの通訳者を対象として、同じ音声知覚実験の結果を比較したところ、帰国子女のプロ通訳者の方が、有意に聴き取りができていた(Ooigawa & Takahashi, 2010)。ただし、帰国子女ではない参加者もプロの通訳者として活躍している点は興味深い。

7. まとめ

プロ通訳者間の実験データの結果の比較に基づくと、通訳者になるには、やはり帰国子女の方が有利なのではないかと思えるかもしれないが、そのように結論づけるのは、まだまだ十分ではない。実際に帰国子女でなくとも、プロの通訳者として活躍している、実験参加者のような存在もある。この点は大変興味深い点である。今後はインタビューを実施するなど、帰国子女でないプロの通訳者の音声面での調査も必要であると思われる。

確かに帰国子女の通訳にも、内容がソーススピーチから大幅に逸脱していた部分はなかったが、これが「帰国子女が聴き取りが

よくできているため」と簡単には結論づけられないであろう。そのためには、帰国子女と同じくらいの英語力を有する、帰国子女ではない英語上級学習者にも同じマテリアルを訳してもらい、さらに同じ聴き取り実験を実施してその結果を比較する必要がある。また今までの研究では、訓練を受けている学生グループ内でも、帰国子女とそうでない学生の聴き取りの比較も行っていないので、この点も明らかにする必要がある。

言語理解は音声だけに依存するものではないが、通訳者にとって音声は最初に入ってくる重要な情報であり、また時には音声だけに頼らなければならない状況で通訳を行わなければならない状況も発生する。従って、今後も音声と通訳の関係をさらに調査し、必要ならば結果を「通訳をするのに必要な音声教育」に反映させて行きたいと思う。

8. 今後の課題

今後は、帰国子女で訓練生、訓練を受けていない人、帰国子女でなく訓練生、訓練を受けていない人、プロの通訳者で帰国子女、帰国子女でない人で、人数を増やし、音声知覚の実験を行うとともに、その結果を通訳実験の結果と比べて行きたいと考える。確かに、音声以外のものから理解につながることも多いこともあるが、最初に入ってくるのはまず音声であることから、音声面の問題がもしあるならば、また訓練生自身が音声に問題を抱えていると思っているのならば、これを解決することにより、他の通訳の問題の解決の糸口になることを期待する。

9. 現状での教育的示唆

現段階での教育的示唆としては、個人差もあるが、帰国子女の訓練生と帰国子女でない訓練生では抱えている問題が異なる可能性が高いので、別々に訓練するべきであるということが言える。可能ならば、訓練前にリスニングテストや通訳パフォーマンス試験を行い、個々の弱点を明確にし、それに基づいて訓練を行う必要もある。例えば、実験後のインタビュー結果からもうかがえるように、帰国子女でない訓練生は、英語のリスニングに問題を抱えていると多く、時には必要以上に悩んでいることもある。従って、必要ならば音声教育などを行うことにより、

実際の効果も期待できるとともに、訓練生の自信にもつながることが期待できる。

* ワークショップのご講演者及びご来場者頂いた皆様、上智大学言語学会会長の加藤泰彦先生、幹事会及び大会運営委員の皆様、その他学会に関わった皆様全員、ご講演者の研究にご参加頂いた全ての方々に、心より感謝申し上げます。更に、この場をお借りして、本ワークショップの数日前にご逝去された故フランク・スコット・ハウエル先生（上智大学短期大学部学長・理工学部物質生命理工学科教授の）に謹んで哀悼の意を表します。故ハウエル先生には英文で書かれた私たちの多くの論文の校正をして頂きました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

10. 引用文献

- Harris, B., & Sherwood, B. (1978). Translating as an innate skill. *Language interpretation and communication*, 155-170.
- Ooigawa, T., & Takahashi, K. (2010). Identification of English words embedded in sentences by Japanese professional interpreters with different language experiences. *The Interpreters' Newsletter*, 15, 159-171 (published by University of Trieste, Italy).
- Takahashi, K. (2009). Identifying the common problems in English-to-Japanese consecutive interpretations performed by Japanese interpreting students: A case of Japanese interpreting students. *MA Thesis*(Sophia University).
- Takahashi, K., & Ooigawa, T. (2009). Identification of English consonants by interpreting students and professional interpreters. *Interpreting and Translation Studies*, 9, 55-69 (通訳翻訳研究 第9号) .
- Takahashi, K., & Ooigawa, T. (2010). Identification of English consonants and vowels in sentence-embedded words by professional interpreters and student interpreters. *Interpreting and Translation Studies*, 10, 207-217 (通訳翻訳研究 第10号) .
- Takahashi, K. (2012) *Forum* (to be published)